

アートは社会の鏡

問題提起するアーティストとミュージアム

「東京藝術大学准教授／キュレーター／美術評論家」

荒木夏実

Araki Natsumi

アートはその時代や社会情勢を反映し、ときに新たな気づきを世に提示してきた。特に近年は、現在進行形の社会課題をテーマに表現活動を行うアーティストやミュージアムが増え、注目を集めている。キュレーターとして自らも独自の視点で展覧会を企画してきた荒木夏実氏が、現代アートをめぐる、世界の新しい潮流について解説する。

はじめに

アートと聞いて人は何を想像するだろうか。美しいもの、類稀なる才能を持つアーティストによる卓越した作品、それを見て癒やしを得るもの。そのような印象を持つ人も多いだろう。もちろん、美しい作品を見て楽しむこと、展覧会でそのような作品を見ることがによって日常から離れ、ホッとすることなども、アートの素晴らしい側面であることは間違いない。しかし、アーティストが別世界の人間ではなく、私たちの社会の一員であることを考えれば、どの時代であれ、アーティストの作り出すものにはその時代の社会状況が必ず反映されているはずである。

昨今の世界のアートの動きを見てみると、そのことがよくわかる。筆者が訪れたドイツの国際展やイギリスでの展覧会を通して気づいたことを中心に、アーティストやミュージアム（博物館と美術館を含む）がどのように今日の社会問題を意識し、表現や展示を行っているかについて述べるとともに、その可能性について考察したい。

西欧中心のアートの解体と多様なアートのあり方

2022年、ドイツの都市カッセルで現代アートの国際展「ドクメンタ15」（2022年6月18日〜9月25日）が行われた。1955年に始まったドクメンタは5年に1度開かれ、イタリ

インドネシア語で「米蔵」を意味する「ルンブン（Lumbung）」を掲げた。ルンブンとはインドネシアの田舎にある伝統で、将来に備えて米を貯めておく倉庫を示す。貯蔵された米は地域が共有する財産として使われてきた。この精神に基づき、予算や知識、アイデアを公平に分かち合い、持続可能な環境と社会、経済を「コミュニティ」をベースに構築することがドクメンタの目標とされた「*1」。

ルアンルバは以下のように訴える。

知識や歴史や芸術に関する西洋的「中心性」をどう反中心的なものに解体できるか。グローバルなアート界のモデルに合っていないが故に見えないものとされている、多様なアートの実践や作品が存在する。

単なる個人的表現の追求や単体として展示されるための作品、あるいは個人コレクターや権威的美術館に売れる作品ではなく、そ

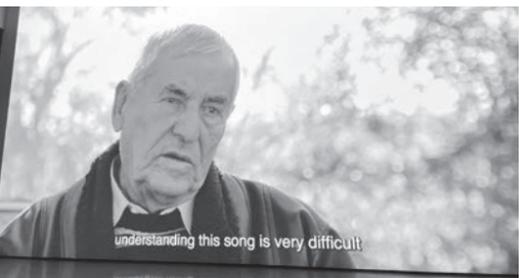
れぞれの環境で異なる現実社会において機能する作品が存在する。それを読み取り、理解することが必要だ「*2」。

すなわち、ヨーロッパ的な「中心性」を解体すること、これまで西欧世界によって規定されてきたアートの文脈ではすくい取れなかった多様なアートが存在すること、それぞれの社会で機能しているアートを理解する必要があることを高らかに宣言したのである。それは行きすぎた資本主義によって搾取されてきた「グローバルサウス」の反資本主義宣言にも聞こえる。

展覧会には通常の美術館では見ることのない作品が数多く紹介されていた。参加アーティストのほとんどがコレクティブ（グループ）であることも特徴である。個人のアーティストによる自律性の高い作品ではなく、それぞれの社会状況を反映した共同体による表現が紹介されていた。



（画像1）インドネシアを拠点とする世界的なアーティスト集団「ルアンルバ」。写真提供／著者



（画像2）「ドクメンタ15」シェロ・ヘンデ監督《孤独な木々》の上映風景。撮影／著者（以下、すべて）



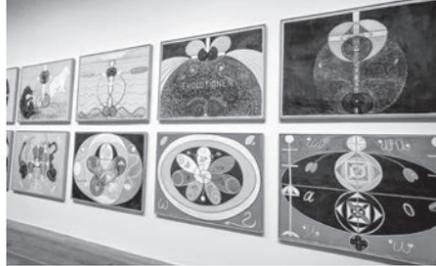
（画像3）「ドクメンタ15」タリン・パディ、ダンボールの人形。

アの「ヴェネチア・ビエンナーレ」と並ぶ重要な国際展として、毎回大きな注目を浴びている。15回目となる今回、展覧会の陣頭指揮を執る芸術監督としてインドネシア出身のアーティストコレクティブ（グループ）である「ルアンルバ（Lumbung）」が選出された（画像1）。ヨーロッパ出身の芸術監督が常である国際展においてアジアから監督が選ばれたことは初めてであり、しかもアーティスト集団であったことは画期的なできごとだった。

2000年にジャカルタで結成されたルアンルバは、急速に都市化の進むインドネシアの社会問題に焦点をおき、展覧会やリサーチ、ワークショップ、出版など、様々な活動を行ってきた。彼らは「ドクメンタ15」のテーマとしてイ

例えば「コミナ・フィルム・ア・ロジャヴァ」（Kolina Film a Rojava）は、シリア北部のクルド人を中心としたロジャヴァ自治区の映画製作者たちによるコレクティブで、クルド人の文化を映像に収めている。シェロ・ヘンデ（Selo Hinde）監督による《孤独な木々》（The Lonely Trees）（2017）では、クルドの民族歌謡を歌う名人たちの姿が紹介された。美しい草原の景色をバックに響く、その圧倒的な歌声の世界に引き込まれる。迫害と弾圧の歴史の中で失われつつある少数民族のクルド文化を後世に伝える貴重な映像である（画像2）。

インドネシアのコレクティブ「タリン・パディ（Taring Padi）」は、展示会場の建物の庭に彫（こ）りつけたダンボール製の人形を設置した。そこには差別への反対、移民の苦しみなど様々な発言が書かれている（画像3）。タリン・パディはインドネシアやヨーロッパ各地で、多様なコミュニティとのワークショップを行い、これらを制作した。説明には「インドネシアの影絵人形芝居（ワヤン・クリ）の伝統と、社会正義を求めるアクティビスト（政治的・社会的な活動家）の活動を結びつけた」とある。建物内の会場にも数多くの版画やバナーがあり、庶民の身近な素材と技法を用いてメッセージを伝搬するアクティビストの手法が用いられている。300年以上にわたるオランダの植民地支配、第二次世界大戦中の日本軍による占領、冷戦時代はスハルト政権による弾圧に苦しんだ歴史を持つイン



上／(画像4) 展覧会「Hilma af Klint & Piet Mondrian」の様子。下／(画像5) 展覧会「A World in Common: Contemporary African Photography」の様子。



ドネシアのアーティストにとって、アートとアクティビズム(行動主義)は切っても切れない関係なのである。

その他の作品も、少数民族のロマの伝統、オーストラリアのアボリジナルの抵抗、非西欧文化圏におけるLGBTQ+の人々のコミュニティなど、これまで紹介されることの少なかった地域のマイノリティの現実を直視させる内容が多かった。日本人の筆者を含む、資本主義の先進国において紹介されるいまだ西欧中心の「アート」に慣れた訪問者にとっては、初めての光景、そして初めて知る問題が多く提示された展覧会であったことは間違いない。東南アジアのアーティストコレクティブが、アラブや南アメリカなど非西欧、非先進国の様々なコミュニティと連帯し、現在進行形のあらゆる問題を激しく訴えかけてくる。そのような熱を感じるきわめて刺激的で画期的な国際展だった。アートと政治、経済、アクティビズムが分離されず、混在する状態。「それぞれの環境で異なる現実社会において機能する作品が存在する」

の活動に印をつけ、位置づけ、保存して将来参照できるようにすることは、未来の世代に「私たちはここにいた」と知らせるために大事なことなのです」[*4]と語るように、ムホリは南アフリカの性的マイノリティの存在をないものにしないでほしいと強く願い、生きている証として写真に記録するのである(画像7)。

ムホリはクィア(Queer)によるビューティーコンテストの様子も撮っている(画像8)。クィアやトランスジェンダーに対する根深い差別意識を少しでも変え、参加者だけでなくそれを見る人の意識が変化することをムホリは望んでいる。1972年生まれのムホリは、1990年代初頭まで続いた南アフリカのアパルトヘイト(人種隔離政策)による黒人差別の偏見と暴力の歴史も体験してきた。ムホリのLGBTQ+を鼓舞し続ける活動は、白人支配への黒人による抵抗の歴史とつながっている。本展の中でも、第二次世界大戦後から今日に至る南アフリカの差別と抵抗に関するできごとが、ポスターや映像とともに時系列に示されている。

年表を見ると南アフリカが2006年に法案を通し、アフリカ初、世界で5番目に同性婚を認めた国であることがわかる。それにもかかわらず、迷信や因習による性的マイノリティに対する人々の差別意識は非常に強い。「治癒する」という目的で行われるレズビアンへのレイプや、LGBTQ+への暴力や殺人が絶えないのである。ムホリはそのような犠牲となった仲間の葬

と明示したルアンルパの意味するところを深く理解できる貴重な体験だった。

変わる西欧のミュージアム

ヨーロッパを代表する国際展の監督をルアンルパが任された背景には、当然ながらヨーロッパ内での大きな変化がある。これまで西欧白人男性を基軸としてきた美術史を見直し、自らの植民地主義の歴史を振り返り、女性や被植民地出身、移民、その他の非白人アーティストを紹介しようとする動きである。また、性の多様性に注目して性的マイノリティのアーティストにも注目している。

イギリス国内に4館の国立美術館を擁し、イギリス政府が所蔵する美術作品を収蔵・管理するテートでは、近年女性や黒人を扱った展覧会が数多く開催されている。『The Art Newspaper』の見出しに「2021年のテートの個展は女性が席巻」と書かれていたように[*3]、この年は女性作家のルバイナ・ヒミッド(Lubaina Himid)、草間彌生、ゾフィー・トイバー・アルプ(Sophie Taeuber-Arp)、ポーラ・レゴ(Paula Rego)の個展が開催された。

2023年には、スウェーデンの女性前衛画家ヒルマ・アフ・クリントをピート・モンドリアンとともに紹介する「Hilma af Klint & Piet Mondrian」(画像4)、サラ・ルーカス(Sarah Piet Mondrian)(画像4)、サラ・ルーカス(Sarah Lucas)の個展と70〜80年代にイギリスで活躍

儀の様子も展示している(画像9)。

展示の最後の壁に、ムホリの言葉がある。「南アフリカやそれ以外の地域でヘイトクライム(偏見や差別、憎悪を動機とする犯罪)が高まる中で、私の使命は、南アフリカの黒人のクィアやトランスの視覚表現の歴史を書き直し、私たちの抵抗と存在を世界に示すことです」[*5]。ルアンルパが「ドクメンタ」で示したように、アートとアクティビズムが一体となり、現在進行形の「現場」の問題に対峙する態度がムホリの写真と言葉から伝わってくる。

そして歴史を振り返れば、かつてオランダと争いながら南アフリカを植民地化し、黒人労働者を搾取して鉱山からの富を得ていたイギリスにとって、南アフリカの現在にまで続く様々な問題は、ひとつとでは済ませられないだろう。被植民地出身のアーティストによる多くの展覧会が各地で開催されている事実から、イギリスの植民地主義への反省と、それを昔の話として終わらせるのではなく、これまで見てこなかった歴史と文化に光を当てようとする決意が感じられる。

戦争への今日的な視点

世界における究極の問題ともいえる戦争。戦争の実態に真っ向から取り組むミュージアムがある。イギリス国内5館の博物館から成る帝国戦争博物館(Imperial War Museum以下、IWM)は、

した100人の女性アーティストを見せる「Women in Revolt」が開催された。また、「白人によって表象されるアフリカ」ではなく、アフリカ出身の写真家が撮ったアフリカを紹介するグループ展「A World in Common: Contemporary African Photography」(画像5)が開かれた。筆者もいくつかの展示を実際に見て、テートの姿勢を強く感じた。

先日(2024年12月)筆者が訪れた際には、ロンドンのテート・モダンにおいて南アフリカ出身の写真家ザネレ・ムホリの大規模個展「Zanele Muholi」(2024年6月6日〜2025年1月26日)が開催されていた。ムホリはかつてより自らを「アーティストでありアクティビスト」と名乗っており、南アフリカにおける黒人のLGBTQ+のコミュニティのために作品を制作してきた。

2006年から今日に至るまでムホリが作り続けているシリーズ《Faces and Phases》(画像6)は、南アフリカのLGBTQ+の個人々人を撮ったポートレートで、これまで制作した総数は600点を超える。会場の壁を埋め尽くす写真は圧巻だった。ムホリは被写体と長い時間をかけて関係を作り、時を経て同じ被写体を撮るケースもある。そのようにして様々な段階(Phases)を記録するのだ。被写体の強い眼差しは、自身の存在を誇るようにまっすぐとこちらを見つめる。それはムホリの意図するところでもある。「視覚表現の歴史を通して、私たち



個展「Zanele Muholi」の展示風景。右／(画像6)ザネレ・ムホリ《Faces and Phases》、中上／(画像7)《Katlego Mashiloane and Nosipho Lavuta, Ext. 2, Lakeside, Johannesburg》、中下／(画像8)《Brave Beauties, Durban》、左／(画像9) 展示された葬儀の様子。





(画像10) 企画展「戦争と心」入り口の映像。



右／(画像11)「戦争と心」第一次世界大戦のポスター。
上／(画像12)「戦争と心」イラク戦争時のトニー・ブレア元英首相の映像。

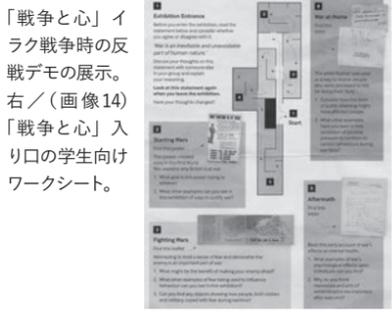
第一次世界大戦（略称、WWⅠ）以降の紛争とそれが人々に与える影響に関するミュージアムで、紛争を経験した人々の経験を物語る品々やストーリーを収集している*6。IWMロンドンでは戦争が人々の精神に与える影響を探ることを目的とした「戦争と心 (War and the Mind)」(2024年9月27日〜2025年4月27日)という興味深い企画展が開催されていた。まず入り口のパネルにオーケストラの演奏家や陸上競技のアスリートの姿とともに短い言葉が映し出される。「私たちは協力し、そして競争する」「人々の競争心は大抵は無害なものだ」「しかし、対立するアイデンティティや野心、考えはグループ間の危険な緊張を生み出すことがある」。さらに戦場の兵士と言葉が浮かび上がる。「歴史を通して、人間は暴力に頼ってきた」(画像10)。

このごく短い映像の中で、戦争が起こる構造が端的に描かれているのである。それが特別な「戦争をなくすことは可能か不可能か」という根源的な問いに、筆者も簡単には答えを出すことができない。これだけ悲惨な経験を繰り返しながら、どの国も同じ口調で戦争を肯定し、市民が巻き込まれていく。その実態を、戦争博物館はあらゆる資料を通して伝えている。世界最大の帝国主義国だったイギリスの博物館が、国家や戦争を讚めるのではなく、徹底した研究と分析によって今日的課題に取り組んでいる。その態度に感嘆する。

ひるがえって、このような展示や議論が日本のミュージアムや教育現場で可能だろうか。「戦争＝悪」「平和こそが大事」などのお決まりの言葉で思考停止していかないだろうか。世界の見れば、幾つもの終わりの見えない戦争が進行している。その中で「答えを出す」のではなく、思考すること、議論して多様な意見に耳を傾けることが必要なはずだ。



上／(画像13)「戦争と心」イラク戦争時の反戦デモの展示。



右／(画像14)「戦争と心」入り口の学生向けワークシート。

ことではなく、誰にでも起こりうることも容易に想像できる。

会場には多くの戦争に関するポスターや映像などが展示されている。兵士を鼓舞するものや国に残された人々を励ますもの、敵を貶めるものなど、どの国でも戦時の言葉遣いは似通っている。第一次世界大戦にイギリスが参戦する理由を書いたポスターには「命と名誉、自由、人類」を侵略者から守るためという大義名分が示されている。単純化された原因、子どもでもわかる簡単な言葉、語呂のよきなど、プロパガンダ特有の明快さが表れている(画像11)。

開戦時、当時の首相が国民に対しどのように説明したかを示す映像も興味深い。第二次世界大戦時のネヴィル・チェンバレン、フォークランド紛争時のマーガレット・サッチャー、イラク戦争時のトニー・ブレアのスピーチの映像が流れていた(画像12)。

しかし、威勢のよいプロパガンダとは対照的に、資料や元兵士のインタビューを通して調査を行った研究者の説明や、展示壁に書かれた元兵士の言葉からは、切迫した戦場での状況が伝わってくる。「夏場の暑さで常に鼻を突く血の臭いがしていた(WWⅠ)」「神経がやられてしまって、爆撃の音に震えが止まらなかった。怖いわけじゃなくてただ震えを抑えられなかった(WWⅠ)」「人から『あなた戦地で素晴らしい仕事をやってのけたね』と言われることに耐えられなかった。何もかもが耐え難かった(A

現在進行形の問題を表現に

植民地主義の歴史、人種、ジェンダー、移民など、世界のアーティストとミュージアムは現在進行形の問題に対して果敢に取り組んでいる*8。自国の過去を振り返り、見過ごしてきたストーリーに注目し、多様な当事者の視点を取り込む努力をしている。エンターテインメント性だけに焦点を当てるのではなく、波風を立てながら根本的な問題提起をしていくことがアートやミュージアムには可能なのだ。

単純な比較はできないが、日本では政治的テーマをアートの表現で扱うことは敬遠される傾向がある。小泉明郎や藤井光*9など、日本の過去の植民地主義や戦争に向き合い、優れた作品を表現するアーティストも増えているが、ミュージアムなどの公的組織が積極的にそのようなテーマに取り組むことは少なく、またその実践が容易ではないのが現状である。何かのきっかけで展示が「思想的」とみなされて「炎上」し、批判されることもある*10。

より多様な視点をもつ展覧会を展開するためには、それを受け入れる社会的環境が必要だ。そして展示を見るオーディエンスも「善悪」や「好き嫌い」ではなく、様々な価値や思考をまづ受け入れ、それに賛同したり反対したりする議論に参加していくことが大切だろう。アーティストやミュージアムが自由でオータナティ

フガニスタン紛争」*7。

兵士が戦地で精神に異常をきたす現象は第一次世界大戦に「シエルショック」(砲弾ショック、戦争神経症)と呼ばれ、後に心的外傷後ストレス障害(PTSD)として分析されるようになる。兵士たちを収容する簡素なテントの治療所の写真や異常行動を記録した映像などが展示されていた。

さらに本展の興味深かった点は、第二次世界大戦後の反戦ポスターや反戦デモの記録が多く紹介されていることだ。2003年のイラク戦争にイギリスがアメリカとともに参戦した際には、イギリス各地で反戦運動が起こった。「戦争ではなくお茶を(Make Tea Not War)」と書かれたポスターや、プラカードを掲げてデモ行進する人々の映像が展示されていた(画像13)。

また、展覧会入り口にあった中学生以上の学校向けのワークシートも注目に値する。例えば以下のような質問がある。

展示を見る前に以下の記述に賛成か否かを答えてください。

「戦争は人間の性分の一部であり、避け難く、なくすことは不可能である」

他の人の考えを聞いて、自分の意見の理由を説明してください。

展示を見終わった時にもう一度この記述を見てください。あなたの考えは変わりましたか？(画像14)

づな問題提起を発信していくためにも、「拒絶」ではなく、対話の機会がもっと増えるといい。私自身が多様なアートやミュージアムを通して見たことのなかった文化や歴史を知ることができたように、多くの人がその機会に触れることができる社会を目指したい。より開かれた世界を目指して。

注

- *1 Documenta fifteen Handbook, p.12
- *2 同右pp.17-19
- *3 "Women artists to dominate Tate's 2021 solo shows" THE ART NEWSPAPER, 10 July 2020
- *4 展覧会「Zanele Muholi」(Tate Modern, 2024)の展示解説より
- *5 同右
- *6 Imperial War Museums ウェブサイトより
- *7 展覧会「War and the Mind」(Imperial War Museum London, 2024)の壁のテキストより
- *8 今回の紹介は一部だが、世界各地のミュージアムでこれらの問題を振り返る展示が行われている。
- *9 個人と集団の関係を鋭く観察し、その深層心理を探る作品を発表してきた小泉明郎は、第二次世界大戦の元兵士との対話を通して、戦争体験をテーマにした演劇的作品を制作している。藤井光は、日本の帝国主義に関する問題を様々な角度から探り、植民地支配の構造や戦争とアーティストの関係、現代の移民問題など、過去を見つめることで見えてくる今日の諸問題をあぶり出す作品を制作する。
- *10 例えば2019年の国際展「あいちトリエンナーレ」では、企画展「表現の自由展」のその後」に出品された従軍慰安婦を連想させる《平和の少女像》(キム・ソギョン、キム・ウンソン作)などに反感を覚えた人々からのクレームが事務局に殺到し、「不自由展」を3日間で中止する事態が起きる。企画展中止を検閲とみなした海外の国際展参加アーティストが自身の展示を閉鎖したり、変更するなどの抵抗運動が起こった。

荒木夏実(あらき・なつみ)
東京藝術大学准教授。キュレーター、美術評論家。フランス・パリ生まれ。慶應義塾大学文学部卒業、英国レスター大学ミュージアム・スタディーズ修了。三鷹市芸術文化振興財団(1994年〜2002年)、森美術館(2003年〜2018年)のキュレーターを経て、2018年より現職「ゴッホ・ビトゥーインズ展」なども通じて見る世界」(2014年)で第2回倫理美術奨励賞、第10回西洋美術振興財団学術賞受賞。現代美術と社会との関係に注目し、アートをわかりやすく紹介する活動を展開している。